

トラベルライティングと国民国家

——マレーシア華人作家卓衍豪

Keeping National Identity by Travel Writings: Case Study of Malaysian Sinophone Writer, Chok Yen Hau

舛谷 鋭 [立教大学観光学部・教授]

MASUTANI, Satoshi

Abstract: How to build a nation-state identity? In this paper, I have introduced the issue of tourism, and in particular, national identity through travel writings of Malaysia Sinophone. It has not been included in the national literature yet. However, Chok Yen Hau's travel writings with photo of Malaysian villages suggest that the pastoral landscape of Malaysia is not only a tourism resource but also a symbol that can be shared by all nations. In the future, it will can become a true shared symbol.

Keywords: 観光文学研究 (Literary Tourism Studies), トラベルライティング (Travel Writings), 馬華文学 (Malaysian Chinese Literature), 華語系華人文学 (Sinophone)

- I はじめに
- II 多文化社会のサイノフォンと国民国家
- III 馬華文学と国家文学
- IV マレー文学と国家文学
- V トラベルライティングによるマレーシア発見
- VI 国内旅行による政治的観光立国
- VII 故郷回顧, マレーシア発見
- VIII おわりに

I——はじめに

本稿はトラベルライティング一般や定義を扱っ

た前稿¹から、具体的な事例として、対象を絞り込むため現代マレーシアのサイノフォン(華語系華人文学: 馬華文学²)によるトラベルライターを取り上げ、従来国語(マレー語)に依らない非主流文学からの、多文化社会マレーシアの華人曰く「国家文学」へのアプローチを確認する。後述する卓衍豪の「マレーシア発見」は、まだ行方の定まらない活動ではあるが、観光を巡る表象が「想像の共同体」としての国民国家にとってどのような影響を及ぼし得るか、地域研究から東南アジア華僑華人を対象に、言語文化(文学)を手掛かりに探求する観光文学研究の試みである。

II——多文化社会のサイノフォンと国民国家

マレーシアのサイノフォンは、冷戦下で東側だった中国大陸由来の現実主義文学(リアリズム)を中心とする方修³らの文学資料の収集、整理とその後の研究の蓄積から「馬華文学」としてマレーシア、シンガポール華人の独自の文学史が整備された。しかし冷戦後、マレーシア独立以降生まれの作家たちにとって、華人内部でのみ流通する従来の文学史は不十分なものと評価される⁵。1992年に『星洲日報』紙上などで交わされた開庭審訊論争はその顕著な一例である。

マレーシア主要華字紙『星洲日報』文芸副刊(頁、別刷)「星雲」に発表された「開庭審訊」⁶は当時日本留学中だったサイノフォン作家シルビア・シエンによるもので、このノンフィクションスタイルの短篇小説は、筆者が東南アジア史学会(当時)例会で行った馬華文学史についての報告と、それに対する日本人研究者の質疑、反応が題材とされている。馬華文学は「マレーシアの中国文学」と改称され、海外日系人も投稿する「朝日歌壇」並のスケール⁷で評価されるという内容は、馬華文学が絞首刑にされたイラストと相俟って大きな反響を呼び、4カ月に亘る文学論争へと発展した⁸。

開庭審訊論争は經典欠席(古典不在)論争とも呼ばれ、中国文学の支流と見做されたことへの反証は文学史や何より独自の古典の有無の問題とされたが、マレーシア文学に含まれなかったことについては、馬華文学の定位(定義)論争として検討された。馬華文学は確かに戦前は中国文学の「海外版」だったが、こうした過渡的状況は「移民文学」が必ず経験する過程であり、戦後になると自らの文学が、遙か彼方の中国でなく、現地マラヤに属することがはっきり意識される。戦争という期間を体験することによって現地マラヤでの共有体験と帰属感ができ、華人作家たちは国家への「愛国

主義」¹⁰が「僑民主義」より貴いことに気付きはじめる。こうした文脈で戦直後、主に英領シンガポールで胡愈之や郭沫若などの中国作家らを交えて行われた馬華文学の独自性をめぐる「僑民文学論争」¹¹が挙げられ、開庭審訊論争の進行の中で、同種の論争として意識されもした。

しかし、90年代初の論争から三十年が経ち、主要な参与者だったシエンは海外へ去り、黄錦樹は台湾で国籍を取得し、陳応徳や陳雪風のように逝去した執筆者もいる。馬華文学がサイノフォンと呼ばれるようになった後もこの論争はまだ意義があるのだろうか。マレーシア、少なくとも華人社会では、コロナ下での出版活動はかえって盛んになっているようで、そうした試みの一つである『コロナ下の人』¹²には90年代生まれの盧珮伊の「馬華文学と現代文選」が収められているが、「經典欠席論争」から説き起こし、文学における古典(經典)はどのように構築されるかを論じている。また、80年代生まれの呉小保は文学、歴史を論じた著書¹³の中で黄錦樹の90年代初頭のこの論争時の論点を紹介し、さらに本稿と直接関係する「国家文学」について論点を整理しているが、まずは馬華文学の立場から国民国家の文学を整理しておこう¹⁴。

III——馬華文学と国家文学

独立後に誕生した世代にとってマレーシア独立とその背景は疑いなく自国史であり、その前提の下で外国人研究者の「マレーシアにおける中国文学」はそもそも誤解と映る。すべてはマレーシア文学であり、馬華文学の馬は「マレーシア」、華は「華語」でありマレー語、英語、タミル語などで創作された文学と使用言語で区別しているにすぎない。馬華文学が初期の段階で五四運動以降の中国語口語文学の成果を受け継いでいたことは否認できないが、祖籍(祖先の出身地)ということばはあるが、僑民文学論争以前の「祖国中国」という概念

は意味を持たず、ディアスポラではあるが同じくポストコロニアル状況下の文学として、ラテンアメリカ文学のスペイン語利用などが引き合いに出される。

しかしマレーシアでは、1971年の国家文化の提唱以後、馬華文学は非マレー語文学として少なくとも「国家文学」の埒外に置かれていると認識され、華人は「マレー語マレー人文学＝国家文学」という図式を仮想して反発を強める。これはマレー人優遇という基本的性格を持つ新経済政策(NEP, 1971-1990)から始まる非ブミプトラ(華人, インド人:非主流)とブミプトラ(マレー人, 先住民:主流)に二分された状況を反映しているが、華人はこのままでは国民の一部(マレー人)しか文学を持ってないと主張し、過去のマレー文学への貢献を持ち出すなどした。¹⁵ また政府が1982年から行なっているマレーシア文学賞を「国家文学賞」と翻訳し、マレー語マレー人作家が占める受賞者の顔触れに不満を募らせる。「マレーシア文学」を意識しないマレー人への苛立ちの現われだが、こうした視点は「マレーシア文学」を *Bangsa Malaysia* (Malaysian nation) の文学と言い替えれば、1991年に第一次マハティール政権下で提唱された「2020年構想 (Vision 2020) の The 9 Central Strategic Challenges の筆頭に掲げられた “*Bangsa Malaysia*” の創出を先取りしたものとも取れる。NEP後の多民族二分状況から国民統合の面での前進を目指した “*Bangsa Malaysia*” だが、一部華人たちによって生来の民族でなく創られた国民国家の構成員ということで「馬來西亜国族」と否定的に翻訳される。¹⁷ その後のナジブ政権の「ワンマレーシア」(2009)やコロナ下でイスマイル・サブリが打ち出した「マレーシアンファミリー」(2021)などたびたび持ち出される国民統合のスローガンだが、次に前述呉小保の国家やマレー人の立場からの「国家文学」の整理を紹介する。¹⁸

IV——マレー文学と国家文学

呉は主に国立言語・書籍局(DBP)¹⁹のマレー文芸誌『文学月刊』(Dewan Sastera)を参照しているが、後述のように観光資源としてはマレー、中華、タミルら多文化社会が強調されるが、国家文学においては単文化、特にマレー主義的マレーシアに収斂されるという。「マレー半島各民族作家の小説」(2003)では独立前後の五十年代には、国家文学はマレー語必須というわけではなく、どの言語に限るということはなく英語文学が優位になったが、独立後七十年代にはマレー人研究者の議論を経て、マレー文学が国家文学の唯一の正解で、マレー文壇が国民文学として国家の承認を受けたという。²⁰ しかし八十年代には、同じマレー人研究者が非マレー人の参画は、マレー文学と言語をより豊かにするので、華人一仏教、タミルーヒンドゥー教と西洋人一キリスト教などの思想世界に開放していることを明らかにすべきだと述べたという。²¹ そのための条件は必ずマレー語で表現されていることだったが、同じ『文学月刊』1月号に掲載された「21世紀初期における各民族作家の小説」(2003)によるとマレー人以外のマレー語文学は1割にも満たず、国家文学の一部とするには少な過ぎたようだ。²²

『文学月刊』は1971年創刊以来、マレー文学とマレー語の振興を使命として作品掲載だけでなく、文学活動や研究プロジェクト、書籍出版などを行ってきた。通して眺めると「国家文学」についての文章が散見され、必ずマレー語で書かれ、国民の団結を促し、イスラーム信仰の上に成り立っているという点が共通している。英領下からの英語文学の衰退を嘆く文章が載る一方、コモンウェルス(英連邦)文学賞があるではないかという反論もある。呉はタミル文学にも触れているが、前述の国民の一部しか文学を持ってないという華人の主張と軌を一にしているようだ。²³

前述マレーシア文学賞(現特別文学賞)に対抗し、華人社会は華文作家協会主催の「馬華文学大賞」を1989年から馬華文学フェスティバルの目玉として隔年開催し、受賞作家の自選作品集が「馬華文学賞大系」として出版されているが、タミル文学にも晴れ舞台はあるのだろうか。

V——トラベルライティングによるマレーシア発見

マレーシア政府観光局が1999年の海外向けキャンペーンで使用した「マレーシア、本当のアジア」(Malaysia Truly Asia)は、多文化社会マレーシアこそ、真のアジアを表象しているというインバウンドへのアピールだが、親しみやすい曲調とともに様々な動画シーンで使われ、ある程度普及している。²⁴これはバリ島やアンコール遺跡を持たないマレーシアの苦肉の策だが、実は民族ごとに言語、宗教、生活圏などが縦割りで並列し、人口比で勝るマレー人と他の民族との交わりは文学や映画の題材として取り上げられるほどの非日常で、たとえばマレー半島西海岸に集住する華人の、マレー半島東海岸やボルネオ島サバ、サラワクへの国内旅行は、さながらエスニックツーリズムの様相を呈する。州を跨がなくとも首都クアラルンプールの都市観光において、たとえば後述のTEDxPetalingStreetなどの活動でチャイナタウンの伝統建築が整備された一帯では、コロナ下で海外に行けないマレー人の若者が休日ともなれば大挙して襲来し、インスタ映えを楽しんでいる姿が目につく。

写真家でエッセイストの卓衍豪(CHOK YEN HAU)は、自分が写真や文章で切り取る以前はマレーシアの美しさは強調されてこなかったと言い、すべてのひとびとのための「マレーシア発見」を提唱し、後述する「MY ROAD PLANNER」を創始した。

多くの場合、私たちは自分の国の本当の美しさを知らないし認めていない。実際見たこともない大自然や文化資源があるにもかかわらず、マレーシア人の日常は豊かなものに囲まれているが、それを語ろうとしない。そこで私はこうしたマレーシアの「発見」を他のマレーシア人と共有することに決めた。

私はマレーシア人と共有するためのプラットフォームを紙上に作ることにした。マレーシア人がこうした「発見」を共有し、私と同じく心ときめかせることを望んでいる。マレーシアの美しさを異なる視座から見てみよう。²⁵

彼のトラベルライティングは「MY ROAD PLANNER」と称して主にSNSなどで発信されているが、「マレーシア発見」シリーズ²⁶は華語とともに英語でも出版されている。マレー語による発信はないものの、卓はシリーズの中で、これまで見たことのないようなマレーシアの美しさを、民族を問わないプラットフォームとして共有することを提唱している。こうした試みは民族縦割りへの意義申し立ての一種とも捉えられるが、すでに華人作家の中には、シエンら国内で「敏感問題」としてタブー視されている民族問題を題材化している例もある。²⁷

最初のトラベルライティング『不玩会死』(遊ばなきゃ死んじゃう、2011)によると、卓は1997年頃から海外バックパッカーを始め、14年間の記録を「これは旅行と写真についての小さな本です。何か提案しているというわけではありませぬ。」と書き出される一冊にまとめている。²⁸カラスナップ入りで場所ごとの写真エッセイという構成はその後と同じだが、インドネシア、タイ、ベトナムなどASEAN諸国と中国、日本、ネパールはそれぞれ数編、そして自国マレーシアでは主にマレー半島東海岸が六編、終章「流浪再び」にオーストラリア、フィリピン、ラオス行が一編ずつ収められている。

卓の一連のトラベルライティングは写真と文字が均等か写真優位に配されている写真エッセイで「ライティング」と呼べるかという疑義もあろうが、別稿で定義した通り、²⁹ 広義のトラベルライティングは自伝、回想のような一人称ノンフィクションだけでなく、ガイドブックはもちろん、場所の記述や自然描写、そしてフィクションとともに旅の行程、地図、動画、そして写真などの旅の記録を含む。こうした写真エッセイスタイルのトラベルライティングは、以下で卓が言及しているバリ在住のトラベルライター張耀ら華語系華人文学では一般的だ。卓は最初のトラベルライティングのあとがきで、みやげ話、すなわち語られるだけの旅で記憶に残るのは旅人の表情だけだと述べた後、自分の旅と写真について分析している。

旅は経験であり、写真は観察であり、テキストは凝縮です。(中略)体験と共有は旅のエネルギーの源泉です。それは視覚だけに頼って旅する人には理解できないでしょう。シャッターを切ることと旅の記憶を忘れることは同じように簡単で、視覚と指先で旅を完成させたとき、旅行写真の持つ可能性は輝きを失っているでしょう。撮影旅行が目的の人にとっては問題にならないかもしれませんが、私のような旅人に限っての話なので、気にしないで下さい。経験と共有がなければ、旅は意味を持ちません。写真は単に記録と伝達の道具で、どうして主人公になりましょう。幸運なことに、上手に写真が撮れたとき、私は旅の経験の有るべき場所を探し当てます。カメラは影のように付き従い、私がいっつシャッターを切るべきかわかると、ようやくそのときから旅は、景色と想像の間で漂う居心地のよい状態に収まります。こうした想像と現実の間で、旅はもう一つの顔を見せます。毎回旅を始めると、気持ちは高ぶり、時間が経つとかえって家に帰りたいたい気持ちが起きてきて、

旅の終わりには、始めより気持ちが高ぶっています。こうして旅の途中のあれこれを思い返して出てきた結論は、私は決して旅を心から愛しているわけではなく、家へ帰るために旅しているということです。張耀は『八百年ずっと旅の中』で、旅は要するに忘れるためのものだと言いますが、最初に読んだときはよくわからず、今読み返してみてもようやく、それだけでもないことに気づきます。旅は真実の探求のようなもので、記憶のパズルをかき集め、旅人は不案内な中で理解できたと感じ、パズルが完成している日常を待ち望みます。こうして途切れ途切れ続く旅はずっとロマンチックで、旅人は流浪を負担に思わないばかりか、家へ帰る道を求め、流浪の想像を止めることはないのです。こういう旅人であることは、探し求めているものがすでに定まっているかのようです。³⁰

最近のマレーシア華語系華人文学(馬華文学)に限っても、顔書韻(日本行)、陳美楓(世界各地)、梁国忠ら(アイルランド)³¹のトラベルライティングなど、写真のプロでない旅人の、と言って物書き専門でもない華人文学特有の兼業ながら「自由」な作家が写真と文字を配した写真エッセイの出版が相次いでいる。自由作家らが新聞掲載コラムなどをまとめて出版する際の共通したジャンルと言えよう。しかし、卓の特異な点は自分の旅への透徹した分析だけにあるのではない。

VI——国内旅行による政治的観光立国

TEDxPetalingStreet 開始時、2013年のトーク「ディープトラベル：³³マレーシア観光の扉を開く³⁴」で、卓はマレー半島東海岸トレンガヌや北部穀倉地帯ケダ、ボルネオ島サバ州の漂海民の例や写真を交えて聴衆に語りかけている。

17年前に海外漫遊を始めたときから、訪れた国の人々が母国を熱く語るのに、自分はマレーシアを説明することができませんでした。しかし17年後のいま(2013年)旅行は変わりました。ディープツーリズムによる地域資源の発掘が始まっています。台湾の民宿、各国のファームステイや民泊など、現地の人々と関わり、その場所で体験を深め、自分の足で踏み締めるような旅を経験し、地域から国家を語れるのは羨ましいことがわかります。マレーシアではできないのだろうか、こんなにたくさん観光資源が、自然資源があるのに。(政治的な)観光立国はできないのだろうか。自分の故郷を見せるだけでよいのに。マレーシアを推すには、あまり知られていない景色、たとえばマレー漁村の普通の生活景観を紹介するだけでよいのです。こうした景観の中には、我々マレーシア人が見たことも聞いたこともない場所が含まれています。政府観光局が働かないなら私がやりましょう。私たちは地理の教科書で砂洲やラグーンについて聞いたことがあります。それらはどんなものなのか、国内で見ることができるのに、政府観光局は見つけられません。天然の自然景観の博物館なのに、こうした景観は近すぎてマレーシア人には見えていないのでしょうか。外国の月は永遠に丸く見えます(隣の芝生は青い)。近いと言っても、行けるときに行っておいた方がよいでしょう。行こうと思ったときには、もう失われているかもしれません。人に知られたくない場所をなぜ教えてしまうのか、私を責める人がいますが、それは買い被りというもので、オーバーユースによって損なわれるものと、開発によって失われるものとどちらの破壊力が勝っているでしょう。私が今やっているのはディープツーリズム旅行団を組んで多くの観光客を案内し、各地で体験型

旅行を行なうことで、マレーシア人の意識を醸成したいと思っているのです。この国は我々だけでなく次世代も含めた人々の努力によって、更に先へ進めます。マレーシアはすでに時代の行き止まりに差し掛かっています。我々は共通体験によるアイデンティティを必要としているのです。自分は誰で、どんな人間で、どのような国家を求めているのか。ここから先はどこへ行くことができるのか。これらはすべて自分たちで決め、ずっと我々の手の中であって、(国家計画のように)五年ごとに決めるべきものでもありません。五年待つのでは遅すぎる。ペラには世界一美しいマングローブ林があります。こうした知られていない場所を、自分のペンとカメラによる「マレーシア発見」シリーズとして紹介し、少しでも多くの国民に母国を知ってもらいたいと思います。これは実は誰でもできることで、たとえば海亀のアルゼンチンからマレーシアへ1万6千キロに渡る帰郷の旅こそが、マレーシア人が持つべき思いなのです。我々は海亀に倣って、次世代へこれまでの歩みを教えましょう。故郷に戻って目を凝らせば、この国にはもっともっと多くの美しい資源が存在していることがわかります。観光業の未来に限っても、我々は自分の手で創造することができます。それが私の一番期待していることです。観光客がすべきことはツインタワーの前で写真を撮ることだけではありません。人々の日常生活に近づき触れ合うことで、旅人の経験は他に勝る特別なものになります。観光客はきっと感動します。なぜならこの国の人々が自分の最も身近なものを紹介してくれているのだから。きっとこの国の人々はままとまっていると思います。自分の母国の土地を愛しているのだから。こうして観光客から感激し賞賛され、世界から尊敬される国にな

れます。マレーシア人は自国にそんなに人情味があるとは思っていないでしょう。しかし現在多くの国で、多くの観光客は好んで民泊を選び、現地人と交流し、家庭料理に舌鼓を打っています。我々はこうした道を進めるし、自分で誰かを案内するディープツーリズム旅行団では、家庭料理を学び、帰る頃に観光客は立ち去ることを惜しみ、また来たくります。こうした体験はある種の経験を持ち帰ることで、そうした感覚は他人に伝えることのできる思いになります。これらは永遠に残り失われることはありません。子供たちは海亀の産卵に立ち会い、子亀を海に戻すために触れることで、その感触を忘れません。土地と触れ合い、隣人と交わることで得た親しい感覚は、忘れられず、ずっと残り続けます。ディスカバリーチャンネルやナショナルジオグラフィックを見て、後で行こうと思っても忘れてしまいます。我々は直接行って体験しなければならず、そうすれば変わらず永久に忘れられることはありません。民族が違って政治信条が異なっても握手しなければなりません。我々はみな同じくこの土地で暮らし、誰もそれを壊すことはできないし、独り占めすることもできません。自分の足で私たちのすでに知っているマレーシアの地図を歩き出すことです。歩いた跡に地図が現れます。それは机上の空論でなく自分の足で、眼で、心ではじめて感じ取ることができます。こうした個人的な経験から、マレーシアの観光を照らすことができるでしょう。国内旅行は本当に特別なものです。我々一人一人を私のような故郷を愛する者へと変えることができます。たとえ一冊も本を出さなくとも、自分の故郷を紹介し、この国の一人一人を故郷を愛する者に変え、この国を希望ある国へと変えることができるのです。私のこうした思いは五年

待たずとも速やかに叶えられ、希望に満ちた日々をもたらすでしょう。この国には確かにそれを可能にする熱源があります。ともにマレーシアをよくして行こうではありませんか。マレーシア発見は誰でも始められます。自分の旅を探そうではありませんか。

場所柄アジテーションを含むのは仕方がないが、動画を見る限り、政府観光局や政府が五年ごとに定める国家計画を挟むんで笑いを取るところでは、卓の意図通りに聴衆の反応がある。日本の観光立国推進基本法(2006)では、経済波及効果が強調されるとともに、地域社会に触れられているが、卓の政治的観光立国は後者の延長線上にある。

VII——故郷回顧、マレーシア発見

『マレーシアに戻った頃』³⁵は、マレーシア華人社会で一般的な台湾留学(留台、旅台)³⁶帰りの人々が寄せた回想エッセイ集だが、卓は「故郷回顧、マレーシア発見」と題し、2013年以降の旅エッセイシリーズのタイトルを折り込み、台湾から自らの故郷マレーシアへの帰還を物語っている。

2002年、海外バックパッカーを始めてから6年目、私は初めて自分の母国へ向かった。ずっと考えていたマレー半島東海岸の3号国道を目指し、そこでマレーシアが誇る輝く砂浜、マングローブ、椰子林、高床家屋、車に向かってくる動物たち、そして暖かな人情味を知った。これらはすべて生粋のマレーシアだ。クランタン州の州都コタバルの夜市でイスラームのお祈りの時間に出くわし、屋台の人たちは私がお金を払う暇も与えず消え失せ、売り物もおつりの小銭も置きっぱなしで、ちゃっかり持ち去ることのできる余所者のことなどお構いなしだった。そのときの旅で、

私は初めてマレーシア人であることを誇りに思った。その後マレーシア各地を旅し続けているが、多くの若者が(台湾から)自分の故郷の生活へ戻ったのを目にし、彼らもおそらく不真面目で気楽だけれど自由な歩みの中で、当時の台湾で初めて出会う土地柄と人間関係に強いショックを受け、それらは一つ一つ魂に突き刺さっていたに違いないと思った。

(台湾から戻り)マレーシアの華字紙で十年働いたある日、私は決然とぬるま湯から脱し、マレーシア各地をフィールドワークして、故郷で日常生活を送る人とその物語を集めようと思った。こうした心躍り暖かな日々の中で初めて、私は台湾からマレーシアに戻るという運命を選び取ったことを悟った。台湾で八年過ごしたからこそ、自分の母国に足を踏みしめ、感動することができた。我々のように移動経験から学ぶ者にとって、このような感動は何より大切なことだ。

「マレーシア発見」シリーズを出版した後、全国を回って本を紹介する機会を得た。こうした旅の経験を話して歩くような役柄に、自分ほど向いている者はいない。私は飽きずにあちこち出向いて土地の美しさや人間、事物、景観を語った。キャンパスでは学生に教科書を捨て、旅に出ようと伝え、幼稚園では父兄に子連れ旅行を勧め、若者の集まりでは故郷回顧、マレーシア発見を呼びかけた。こうして自分の心を震わせた物語を紡ぎ出し、マレーシア各地の故郷は自分の故郷になり得ると紹介して歩いたが、幸いだったのは、人々は皆、ナショナルアイデンティティを探し求めていて、私の熱意は心配しなくてもより多くのマレーシア人の故郷回顧や祖国の美しさを求める心を刺激することができた。³⁷

VIII——おわりに

多文化社会マレーシアの中で、独立前後から「マレーシアンファミリー」の時代まで、非主流民族の民族文学はナショナルアイデンティティに踏み込むことは難しかった。しかし、写真エッセイという形式のトラベルライティングは、書き手が華人であろうと、あるいは華人だからこそ、国内旅行を海外旅行のように見なし、価値ある資源を発見し、ナショナルアイデンティティの一助へと進みつつある。前出写真エッセイ作家の陳美楓や比較的早い時期の旅エッセイの著者にインタビューする機会があったが、いずれも華人社会以外を想定していなかったし、何より自由作家らしく、読者を意識する気持ちも薄かった。改めて卓の「マレーシア発見」のマレーシア全体、ことに国民国家への共有意識は希有のものと言ってよいだろう。であればマレー語版を考えればよいのだが、SNSにおける写真掲載で間に合っているようだ。本稿にはカラー写真を掲載しなかったが、ぜひFacebookのMy Road Plannerなどで確認してほしい。東南アジアの田舎はどこもそうなのかもしれないが、卓の言うように、民族問わぬマレーシア人それぞれの故郷は、インバウンドにとって価値があるばかりでなく、マレーシアという国家の姿を民族問わぬマレーシア人たちに、文化を含む自然を中心とする資源として認識させてくれる。マハティールは国家には仰ぎ見るものが必要とKLタワーや二十世紀では最も高かったツインタワーを建設したが、「マレーシア発見」の景観は、本稿の通り、これまで華人の言語表象がなし得なかった、国民国家の共有シンボルという政治的観光立国の可能性を十分感じさせてくれるだろう。

- 1 舩谷 2019
- 2 Sinophone(サイノフォン)はAnglophoneやFrancophoneを参照した「中国語話者文学」だが、中国、中国人、中国語がいずれも複数性を備える概念であることを強調し、中国大陸中心の本質主義に取り込まれないための方法論として意識される。こうした観点から、アメリカの韓国系華人研究者の史書美らによって2000年代半ばから提唱されている。本稿ではこれを現地での一般的な呼称である馬華文学とほぼ同義と捉え、サイノフォン事例として先行研究に含まれる作家には特にこれを用い、中国語利用を強調する際は日本語訳の華語系華人文学を併用する。
- 3 方修(1922-2010)本名、呉之光。広東省潮安からマレーシア経由シンガポールへの移民一世で、1950年代から新聞中心の現地文学資料を収集し、2008年まで半世紀に渡って文学史の構築に尽力した。彼の蔵書を集めた方修書庫が2015年からクアラルンプール郊外の新紀元大学学院図書館に設けられている。
- 4 イギリス植民地からのマラヤ連邦としての独立は1957年、サバ・サラワクラを含むマレーシア連邦結成は1963年。
- 5 舩谷 2004
- 6 『星洲日報』1992.5.1. これを含む論争中の主要な文章をまとめた書籍が出版されている。張永修ら 2002
- 7 マレーシア華人作家の団体が、1978年に最初はマレーシア華文「写作者」協会として登記され、1985年にシンガポールの状況や中国作家協会との交流を勘案してマレーシア華文作家協会と改称されたことを思えば、業余(アマチュア)で商業出版から「自由」な兼業作家しかいない状況を言い当てていたかもしれない。
- 8 シエン 1993
- 9 1963年までの英領マラヤ、シンガポール地域の呼称。
- 10 十九世紀の主に中国華南からの移民は「愛国華僑」と呼ばれたが、その対象は祖国中国だった。
- 11 舩谷 1993
- 12 業余者 2021. 出版状況については、2021本地出版印象(星洲日報 21.1.16)
- 13 呉 2021
- 14 舩谷：馬來西亞族群文学与国家文学(莊 2006)
- 15 インドネシアのクレオール華人による中国武俠文学の翻訳紹介を受け、マラヤのクレオール華人の譚案小説によるマレー文学の普及、文学言語の成立を指す。「クレオール」は血縁的言語風俗が居住地に土着化する過程で現地言語風俗と混交することで、こうした特徴を持つ華人はインドネシアやシンガポールでは「ブラナカン」、マレーシアでは「ババ」(男性)「ニョニャ」(女性)と呼ばれる。
- 16 1971- Hadiah Karya Sastera(文学作品賞)/1977-1980 中断/1981- Hadiah Sastera Malaysia(マレーシア文学賞)/1996- Hadiah Sastera Perdana Malaysia(マレーシア特別文学賞)
- 17 葉 1996
- 18 呉 2021
- 19 Dewan Bahasa dan Pustaka(DBP)は国立言語出版局、図書局、書籍局や国語研究所などと訳されることもあるが、実情からすると本文訳語がふさわしいだろう。
- 20 国家文学を形造る単元文化主義的マレーシア(呉 2021)
- 21 前掲論文(莊 2006から引用)
- 22 再び国家文学論ずる(呉 2021)。その後Lim Swee TinやJong Chian Laiら華人混血のマレー語作家たちが活躍を始めている。
- 23 前掲論文
- 24 藤巻 2010
- 25 大衆書局(2015): POPCLUB 2015年1月号
- 26 Chok 2014, 卓 2013, 2014, 2015
- 27 舩谷：マレーシア文学(川口ら 2001)
- 28 彼の最初の出版物は(2010): 誠徵前女友, Selangor: 有人出版というジェンダーエッセイ集だった。
- 29 舩谷 2019
- 30 卓 2011
- 31 顔書韻(2017): 一期一会的約定, Batu Caves: 大将出版社。陳美楓(2019): 絲路無駝鈴及其他探検故事, Sungai Chua: 陳志英張元玲教育基金。梁国忠, 林敏慧(2020): 模範人生, 我不屑, Petaling Jaya: 創媒体
- 32 謝麗玲(2019): 从國際新聞現場到自己的房間, Batu Caves: 大将出版社, のサブタイトルに、自由業訳者不自由?とあったことが、馬華作家を業余作家(アマチュア)というより兼業の自由作家(フリーランス)と呼ぶヒントを与えてくれた。
- 33 中国語で「深度旅行」英語でIn-Depth Travelと表現されている。
- 34 中国語圏TEDxでは2013年開始はマレーシア最初の試み。大量高速輸送交通MRTによるベタリンストリート(チャイナタウン)の伝統建築破壊への抗議を契機としていた。http://www.tedxpetalingstreet.com/en/
- 35 卓 2018
- 36 国共内戦直後の五十年代初頭以来、東南アジア華人(僑生)の獲得は台湾の冷戦下の反共政策の一部だった。現在でも博士号などの取得で大陸中国へ渡るマレーシア華人はいるが、中国語を媒介言語とする私立高校から国内でなく海外、特に台湾の大学を選ぶことは非常に一般的で「十萬大軍」などと誇張される。マレーシア留台校友会聯合總會(留台聯總)に限っても1974年から3万人以上が台湾を選んでおり、黃錦樹ら卒業後も帰国せず活躍するサイノフォン作家、研究者も少なくない。黄 2014, 廖 2018.
- 37 卓 2018
- 38 康影飛(1993): 單身女子—孤独之旅, Ampang: 佳輝出版

文献

- ♣アンダーソン, B(2007): 定本想像の共同体, 書籍工房早山
Jaya:SIRD
- ♣碧澄編著(2022): 新編馬華文学史(1880-2020), Petaling
♣Chok, Yen Hau(2014): DISCOVERY MALAYSIA, Kuala

Lumpur:My Road Planner

- ❖ 遠藤英樹ら編著(2019): 現代観光学, 新曜社
- ❖ 藤卷正己(2010): ツーリズム「in」マレーシアの心象地理—— ツーリズムスケープの政治社会地理学的考察. 立命館大学人文科学研究所紀要(95)
- ❖ 黄錦樹(1998): 馬華文学与中国性, 台北:元尊文化
- ❖ 黄錦樹ら主編(2014): 我們留台那些年, Petaling Jaya: 有人出版
- ❖ 廖宏強ら編(2018): 我們返馬這些年, Johor: 大河文化出版社
- ❖ 前田勇編著(2019)新現代観光総論 第3版, 学文社
- ❖ 舛谷鋭(1993): 南僑日報と僑民文学論争, 東洋大学大学院紀要29
- ❖ 舛谷鋭(1996): マレーシア華語系華人文学と種族問題(国民開発政策(NDP)下のマレーシア)、アジア経済研究所
- ❖ 舛谷鋭(2001): マレーシア華語系華人文学が持つ意味 ことばと人間3
- ❖ 舛谷鋭(2004): 六十年代マラヤ華人社会における文学史創出期について, 白山人類学7
- ❖ 舛谷鋭(2019): トラベルライティングを考える 立教大学観光学部紀要21
- ❖ シェン・スクライ(1993)マレーシア華人の二重伝統と馬華文学, 白山人類学2
- ❖ 呉小保(2021): 思想 末羅遊(ムラユ)—— 華馬文史散論, Petaling Jaya:Gerakbudaya
- ❖ 葉瑞生(1996): 馬來西国族的論争, 資料与研究23
- ❖ 業余者(2021): 疫中人, Kuala Lumpur:Amateur
- ❖ 張永修、張光達、林春美 主編(2002): 辣味馬華文学——90年代馬華文学論争性課題文選, Kuala Lumpur: スランゴール中華大会堂, マレーシア留台校友会連合總會
- ❖ 宇戸清治、川口健一編(2001): 東南アジア文学への招待, 段々社
- ❖ 莊華興(2006): 国家文学一宰制与回応、Kuala Lumpur: 大将出版社
- ❖ 卓衍豪(2011): 不玩会死 Kuala Lumpur: 海浜出版
- ❖ 卓衍豪(2013): 發現大馬 Kuala Lumpur:My Road Planner
- ❖ 卓衍豪(2014): 發現大馬2 Kuala Lumpur:My Road Planner
- ❖ 卓衍豪(2015): 在地小旅行 Kuala Lumpur:My Road Planner

